

し圖したり。按ずるに、小幡氏の初代宮内長次は、利常卿に奉仕し、一萬九百五十拾石を賜はり、金澤城代等を勤め、寛文四年致仕し、不入と稱す。二代宮内長治は、父の家祿を賜はり、元祿十年歿す。三代宮内立信は一萬六百五十拾石賜はり、寶永三年十一月亂氣に依つて家祿を沒收(せ)され、此の時上屋敷・下屋敷共に上(せ)地と成りたり。

○瑞泉寺前

舊藩中は、瑞泉寺の門前地なりしを以て稱す。明治四年戶籍編成町名改正の時、裏石坂町へ屬せしめたり。

○石坂瑞泉寺

東派眞宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基、初當國石川郡押野村に創立仕、寺號上宮寺と號す。永正元年了祐再建仕、慶長八年押野村より金澤へ出、片町に建立仕處、寛永十年井波瑞泉寺の次男宣心住職と成、瑞泉寺と改稱し、萬治二年今の寺地へ移轉仕。とあり。按ずるに、金澤出大工町上宮寺記には、延文中唯性の時、石川郡押野村に建立、十二世慶了之時、本願寺東西に別れ、此時父子流浪し、佐渡に移り、利長卿之時召に依て金澤へ來り、今の

寺地拜領す。とあり。寛永元年舊蹟取調書に、石川郡押野村領に上宮寺敷と云處有之、上宮寺の寺跡の由申傳。と見、此寺跡は村落の西方にて、今鐘樓堂と云傳へる遺蹟なども存せり。といへり。是即ちいにしへ上宮寺と稱し、押野村にありし時の遺蹟なる事知られけり。さて又按ずるに、犀川片町より轉地せしは、元和元年諸宗寺院をば泉野或は卯辰山などへ移轉を命ぜられし頃なるべし。其の頃の寺地は今の寺地に非ず。延寶の金澤圖を見るに、野町一丁目小路の邊に瑞泉寺と記載す。されば此の地より今の地へ移轉せしもの也。彼の由來書に、萬治二年今の寺地へ移轉と載すといへども、過聞ならんか。延寶の金澤圖を考ふるに、今の寺地は、小幡宮内下屋敷とある地内なれば、今の地へ移轉せしは、寶永三年小幡氏下屋敷の上(せ)地と成りし後、瑞泉寺に彼の跡地の地内を賜はりて、造營せしものなるべし。貞享二年の由來書記載する趣、事實と符合せず。延寶金澤圖は左に載せたる如し。

按ずるに、小倉日記に、享保十八年四月廿八日夜九つ時、犀川雨寶院より出火、千日町・石坂町・野町二丁目まで焼失すといひ、變異記には、享保十八丑四月廿八日夜丑刻、犀川千日町より出火、眞言宗雨寶院・石坂町・野町四丁目迄焼失。神明社・浄土宗大蓮寺・一向宗瑞泉寺・石坂足輕町等類焼、前田修理居屋敷は無難。とありて、此の火災に瑞泉寺は類焼せり。されば此の後再建の頃、前田修理居屋敷の近邊、今の地へ移轉して造營したるならん。享保十八年は、貞享二年より四十九年後なりけり。

○焙爐橋

瑞泉寺の側なる橋梁を呼べり。舊傳に云ふ。昔此の近邊に寶次郎といへる人居住す。故に世人寶次郎橋と稱したるを、後人呼び誤りて、ホイロ橋といへりとぞ。

○寺西庄兵衛上地

延寶の金澤圖に、前田萬之助居邸の隣地、用水川の橋下に寺西八十郎といふあり。此の地邊寺西庄兵衛の上(せ)地にて、そのかみ寺西氏の下邸なりしならんか。八十郎は、養見が初名なるべし。

○寺西養見貸屋敷

外科醫寺西養見貸屋敷の事は、金澤町會所留記に、養見が

